

発行:ラオスの子供に絵本を送る会 〒143東京都大田区南馬込6-29-12ミキハウス303 TEL/FAX03(3755)1603

ラオスの子供に絵本を送る会通信

第2号(1994年1月発行)



1993年8月、ラオス各地を回って、パントマイムや紙芝居を披露した「みつまめ遊戯団」。ソプラノ・サクスを吹いているのは、森順治さん。ハンドマイクを持っているのは、ラオスの俳優で紙芝居を演じたニャーンさん。子どもたちと「幸せなら手をたたこう」をやっているところ。
(編集後記もご覧ください)

サバイディだより②

子ども文化センター構想が動きだす。

ラオスでは、93年より、ヴィエンチャンに「子ども文化センター」を設立する構想が出されています。「子ども文化センター」とは、現在ラオスの学校教育では行われていない、図画工作、音楽、スポーツなどがで

きることをめざした施設です。情報文化省主導によるプログラムで、建物にはオーストラリア政府からの援助も行われます。

ここで絵本を送る会は、図書館を運営することを期待されています。

4室が提供され、工作室、子ども用読書室、大人用読書室、事務室などに利用する計画です。

私たちのカウンターパートである情報文化省のダラーさんは、子ども文化センター設立の背景について、

こう話してします。

「ラオスの子どもたちの置かれた状況について、私たちは危機感を強めています。それは学校教育が十分でない反面、外からのさまざまな好ましいとはいえない刺激が、子どもたちに降り注いでいることです。

ラオスでは学校も先生も少なく、教科は国語、算数などに限られていて、音楽や絵、スポーツは教える先生はいません。これでは子どもたちはイマジネーションも創造性も豊かにしていくことはできません。

その一方でメコン河沿いの地域では、子どもたちはタイから流れてくるテレビ番組で物欲をあおられます。また、テレビの電波の届かない山奥の村では、外国製の暴力ものや下品なビデオソフトを子どもたちに見せて商売をする大人がいるのです。かつてはソ連、東欧の上質の映画が村をまわっていましたが、それも今はありません。

子どもたちというのは、どんな作品であろうと、見たがります。たとえ一食抜いてでも、ビデオを見るためのお金を用意しようとします。それほど、新しいものを知りたい、触れたいという好奇心は強いのです。これに対して、私たちは、子どもたちが創造性を豊かにしていけるものを用意してあげなければなりません。「子ども文化センター」は、そのために作られるのです。

そして、人材が不足しているのも事実です。ラオスは今、ゼロからの出発の時代です。ソ連がなくなり、支援もなくなり、いままで外からの援助に頼っていたラオスは、自分たちの力で国づくりをしていく時を迎えたのです。〈待ち〉の時代から創

造の時代へ変わったのです。これには、人を育てることが最大の課題です。子どもたちのイマジネーションを豊かにできる技術を持った教員

の養成もまた、この計画の中で、大きな意味を持っています」

これから動きだす「子ども文化センター」を、どうぞご支援ください。

ラオスの山奥にて

野口朝夫

シengkワン街を出てから数時間。ベトナム国境へ急ぐ私たちの前には、かつての焼畑の火や伐採により、原生樹木が消え、今や薄っぺらい緑に囲まれた山肌が延々とひろがっている。

遠く、青く、見渡すかぎり連なる山々を眺めながら、高原を通り、トウモロコシの畑が作られた急な谷間を抜け、一つの屋根を越え、二つ目を越え、山並みに沿って、右左にくねりながら、砂利道は続いていく。

驚いたことに、文字通り、そんな人里離れた所にも、ボツン、ボツンと集落が現れる。3～4軒の人家が集まる小さい集落から、50戸近い大きな部落まで、バスも走らない、外界から切り離されたような地に人々が生活を営んでいるのだ。

「どうしてこんな辺鄙な所に住まなければいけないの？」

集落が現れるたびに疑問が頭に浮かぶ。

もちろん電気など来ていない。水道などあるはずがない。高床式の30坪ほどの竹の網代壁、藁葺の家が一般であろうか。大きな水瓶以外、家の中はがらんどろのように見える。

大人は農作業に出ているのか、我々の車が止まると、子どもと老人と犬と黒豚が現れてくる。裸足の五つ六つの子どもが乳飲み子を横抱えに

している。ラオス語はほとんど通じない。

聞くと学校は山を越えて、何キロも遠くにあるという。とても通えない。

しかし、何と心地良い静寂に包まれている村なのか。高い空、ゆったりと風がそよぎ、子どもたちの騒ぎ声、犬や豚のつつき合い、自然の音しか聞こえてこない。

きっと自分の世界だけで完結しているに違いない毎日。

ニューヨークでどんな事件が起ころうか、東京で不況風が吹きまわろうか、はたまたヴィエンチャンで政変があろうか、何の関係もなく、幾十年、同じ毎日が通り過ぎてゆく。

ラオスに行くようになって15年、今回、首都ヴィエンチャンを離れ、はじめて地方を旅する機会があった。そこで営まれている「時」のちがいが。

20年前、チェンマイの郊外、汗をかきかき、山を越え、カレン族の村を訪れた時の記憶が蘇ってくる。あの時の驚きよりも、今回のショックの方が大きい。

今の時代、「どうしてこんな、何も無い、辺鄙な所に住まなければいけないの?」「どうして、こんなに苦勞して?」

それは部外者のつぶやきにしかすぎないが、自分の「ことば」と違う

世界の現出に、思わず忘れてしまった自分の過去に向かい合った気がしてしまった。

絵本を作り、本を配布し、少しでもたくさん子どもたちに「文字」

の持つ豊かな世界を広める。それが我々の「ラオスの子どもに絵本を送る会」の役目として活動しているが、その中で子どもたちの得るものと失うもののバランスを、どこに求める

のか。どのバランスの論理を据えるのか。

「ひとつの世界」とのふれあいに、割り切ることのできない、思いにまた捉えられてしまった。

■ 絵本を送る会の仲間たち ■

「日本の子どもラオスの子ども、元気よく遊ぶのは同じなんだ」

東京都葛飾区立末広小学校

93年10月、東京都葛飾区立の末広小学校4年2組では、参観日にラオスを取り上げた授業が行われました。

「自分の考えをたくさん話そう。発見、一番心に残った写真」というテーマで、ラオスの写真パネル10枚の中から1枚を選んで、感想を言っていくという授業。会からは森透が参加してビデオの紹介をしました。

写真は、河で水遊びをする子どもたち、緑に囲まれた風景、高床式の家、豚をトラックに積む子どもたち、そしてお寺など。

感想のなかで多かったのが、豚をトラックに積む写真。子どもたちが働いていることへの驚きがあったのでしょうか。ある子は、「おとながすわって、こどもがはたらいている」ことが印象的だったようです。

水遊びを見て「日本の子とラオスの子も元気よく遊ぶのは同じだなど思いました」、家の写真からは「ラオスの人々のくふうがわかりました」、緑の多い写真には「住んでみたい」という感想もありました。

また「日本人に生まれてよかった」「ラオスもはやく日本のようになるといいな」との感想もありました。

参観に来たお母さんたちからは、「ラオスの子どもたちが生き生きとしている」「日本の子どもたちは恵まれている」「比較的近くにありながらラオスという国を知らなかったこと

に驚いている」といった感想が寄せられました。

授業を行ったのは芳森久仁子先生。末広小学校では以前から児童会で空き缶を集めてUNICEFにお金を送っていました。しかし、そのお金がどういふふうに関わるのかわかりにくいということがあり、具体的に活動をしている人の話を聞こうということから、芳森先生とチャントソンとの出会いがありました。7月、チャントソンは会で作ったラオスの絵本をもって訪問し、子どもたちにラオスの話を聞かせました。

わら半紙のような紙に1色刷りで印刷した質素な絵本を見て、子どもたちは「えー、こんなものを読んでいるの!」とビックリ。児童会では空き缶2万個を集める目標を立てました。350ml缶を60個で50円。絵本の製作費が1冊70円ですから約240冊分になります。PTAもチラシを作り、卒業生の親も参加して、さらに近くにある金町浄水場の方々も協力してくれました。

授業参観の後、芳森先生と校長先生たちと一緒に給食をいただきました。私(森)にとっては何十年ぶりの給食です。

「いままでの国際理解教育は教室の中だけで行われていました。それは子どもにとって3歩、歩くと忘れてしまう教育でした。今、空き缶を通

して、忘れない国際理解教育が育ちつつあります」

という話でした。

私自身の感想をつけ加えれば、いわゆる途上国に対する感想として出されるものが、多くは優越意識から発するものになりがちであるのが気になる場所でもあります。「豊か」とされる自分たちの暮らしを振り返るような情報の提供の仕方をしたいところです。しかしそれは一朝一夕にはできないことでもあり、私たち会や支援して下さる方々の活動、そしてお互いの交流のなかから生まれてくるものなのでしょう。

ニュースレターづくりに ご参加ください

誌面の中身も、編集作業も、会を支えて下さるみなさんと一緒に作っていただけるニュースレターをめざしています。

企画会議/取材同行/ワープロ入力/発送作業など、制作に参加を希望される方はご連絡ください。また、グラフィックデザイナー、イラストレーターの方、すてきな誌面づくりのために力をお貸しください。

ニュースレターを読んだ感想もお寄せください。

今年もよろしく

遅ればせながら、明けましておめでとうございます。通信がお約束した通りなかなか出せず、申し訳ありません。

昨年は、会として初めて、現地駐在スタッフをヴィエンチャンに送り、これまでの会の活動評価を行いつつ、移動図書館の作成、配付、絵本の印刷出版、古典図書の再版準備、絵解き辞書の編集など新たな活動を進めることができました。

駐在スタッフを置くことにより、これまで東京では判らなかった、プロジェクト運営上の問題点も少しずつ見えてきました。活動の上でもっと改善すべきことはありそうです。

今年は、ラオス政府の要請もあり、ヴィエンチャン市内に、子ども文化センターを開設する予定で準備に入っています。

一方ラオスの社会は、この2～3年の開放政策の影響から、急速に変

チャントソン インタヴォン

化を遂げております。その結果、経済格差が広がり始めており、都市部と山間、農村とのギャップはますます大きくなっているようです。子どもたちを取り巻く環境が、単純によくなっているとは言えません。

そのような状況の中、私たちの会に対する現地の期待は、予想以上に大きく、実際のところ、われわれの力量を越えております。

子どもたちが良い環境で学んでほしいという我々の限りない願望と、東京には専従スタッフがないことによって生じている、現実の運営能力とのギャップを少しでも埋めていきたい。それが今年の基本的な方針といえます。

そのためには、何よりも皆さんからの、大きなご支援を引き続き頂くことが不可欠です。

どうか本年もくれぐれもよろしく願い申し上げます。

編集後記

◇昨年の夏、会とラオスの情報文化省のコーディネートで、小劇団「みつめ遊戯団」がラオス各地の村や町を回り、合計13か所で公演を行いました。子ども向けのパントマイムを中心にした出しもので、たいへん好評を博しました。そのレポートが、まもなく1冊にまとまります。

◇前号でご紹介しました、国際ソロプチミスト出雲のみなさんの活動で、地元の大社中学校生徒会より、寄付金と文房具をお寄せいただきました。この寄付金は生徒会が呼びかけ、生徒たちが自主的におづかいから出しあったものに、空きびん、空き缶の回収をして得たお金を合わせていただいたものです。どうもありがとうございました。

◇前号の記事で訂正箇所があります。表紙写真の説明で、「国立図書館のダラーさん」とありますが、「情報文化省、ワンナシン(文芸)編集長の」の誤りでした。

会の活動に参加、お手伝いをしてくださる方をお待ちしています。

■ラオスの子供に絵本を送る会では、みなさまのご支援をいただき、「絵本一冊運動」をより広範に進めています。ところが、活動スタッフは慢性的に不足しています。活動に参加してくださる方、作業を手伝っていただける方を募集しています。ラオス、東南アジアに興味のある方、絵本、子どもの教育に関心を持っている方、事務作業の得意な方、特技はないけれど手伝いたいという方、ミーティングをのぞいてみたい方、ご連絡をお待ちしています。

月例ミーティング：第2日曜日 午後1時より

「ラオスの子供に絵本を送る会」事務所に(都営地下鉄浅草線・西馬込駅下車 徒歩5分)

■私たちの活動を資金面から支えてくださる方は、郵便振替にて、下記までご送金ください。

〔東京 0-125420 ラオスの子供に絵本を送る会〕